

四旬節第2主日 (マルコ 9:2-10)

イエスのそばにとどまり続けることで体験することができる



「先生、わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです。」

(9・5) ペトロの言葉は人間の知恵で出たものではなく、とっさに出たものでしょう。とっさに出る言葉はきっと素直な心の声です。自分の言葉を十分に理解していなくても、イエスのそばにすることが素晴らしいと心から感じたのでなければ、声に出せるものではありません。

同じことは私たちにも当てはまります。自然に「イエスのそばにいることは素晴らしい」と言えるのでなければ、信仰生活を維持することも、信仰を子どもたち孫たち、出会った人に伝えることもできません。

趣味やスポーツでも、喜びや楽しみが理解できていなければ、誰かを同じ趣味やスポーツに誘うことができないのと同じことです。「教えた人があとで辛い目に遭うかも知れない」そう思ったら積極的に教えたりしないはずです。

助祭時代の夏休みに、萩原神父様と鯛ノ浦小教区内の巡回教会を一緒にお手伝いして回った経験があります。楽しい時間でした。もちろん単純な楽しさではなく、苦労も味わうものでしたが、「ここに留まることは素晴らしい」と、言葉に表せない何か感じたのを覚えています。

「仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」この世の光景とは思えないような場面に出くわして、それをずっととどめておきたい。ペトロはそうのように考えたでしょう。たとえそれが、未熟な理解から出てきた言葉であっても、あまりのすばらしさにどうにかして留め置きたいと思った気持ちは十分理解できます。

私は、父親が2009年に亡くなったあとで、ビデオをいろいろな場面で撮影しておけば振り返ることができたのになあと悔やむことがあります。たった一つだけ、牛の品評会に参加したときの映像があります。しかしいつまでそれを眺めても、そこに父親をとどめようとしても、何かが違う。そう思えてなりません。

ペトロはどうでしょうか。ペトロも、当時見た「今この瞬間」にしがみつこうとしましたが、ペトロを助ける出来事とその先に待っていました。7節です。「すると、雲が現れて彼らを覆い、雲の中から声がした。『これはわたしの愛する子。これに聞け。』」

光り輝くイエスを見てペトロは「わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです」と叫びましたが、イエスのそばにすることで、留まり続けることで、もっと素晴らしいことに出会うのです。光り輝く姿は一時的でしたが、イエスは復活して栄光に輝く姿となります。そしてイエスを信じる者にも復活の栄光にあずからせてくださるのです。

私はかつて、唯一残された映像の中の父親を、これ以上ない姿だと思っていたのですが、その先があったのです。品評会で胸を張っていた父は、今はイエスのそばにいて、復活の希望に招かれている。かつて父親

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

に誇りと輝きを与えてくださったイエスは、今も復活を信じてその日を待っている父に輝きを与えておられる。朗読箇所のパトロに自分を置き換えてイエスのそばに留まったことで、この理解が得られたのです。どこか別の場所にいたら、この理解は得られなかったことでしょう。

「わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。」私たちは今、みことばを通して、聖体の秘跡を通して、イエスのそばにいます。イエスご自身が、ここにいることはすばらしいことだと照らし、導いています。少なくとも私は、71歳で亡くなって、一つしか映像が残っていない父を悔やむ必要は無いと教えていただきました。イエスのそばにいたから、教えていただきました。

「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。」黙想会も始まります。黙想会も、イエスのそばで過ごす学びの時間です。イエスがそばにいてくださることを体験する時間です。イエスご自身がそばで教えてくれたものは、決して消えることはありません。イエスは私たち皆に「わたしたちがここにいるのはすばらしいこと」と、必ず悟らせてくださいます。

四旬節第3主日(ヨハネ 2:13-25)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。